

阿部晶人の剣道ブラックボックス 第170回

今月の黒箱アクション——

綿毛の街の剣士たち

剣道愛好家の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

空に、綿毛が舞っている。まるで雪のようだ。目を上げると大小の白い塊が数え切れないほど飛んでいて、目を細めながら歩く。この季節、ポプラ科の樹木から放たれるのだそうだ。美しい光景だと思う一方で、これを大量に吸い込んだら人体にどんな影響があるのだろうか、少しばかり心配になる。しかし当地の人々はまったく気にする様子もなく、綿毛の中を淡々と歩いていく。慣れというのは大したものだ。

先月末、私と妻はロシア・サンクトペテルブルクにいた。長男が昨年からここで留学生活を送っており、その様子を見に行くなら今しかない！と夫婦で出かけたのだ。渡航前は、痩せて衰弱している息子と再会するのではないかと勝手に心配していたが、対面してみればロシア語を流暢に操る立派な若者になっていた。心配は完全に杞憂に終わった。むしろ現地では、道案内から食事の注文まで全て息子に助けてもらわなければ何もできず、親としては嬉しくも、少し複雑な気分ではあった。

想像以上に美しい街

サンクトペテルブルクは、想像していた以上に美しい街だった。エルミタージュ美術館では到底時間が足りず、血の上の救世主教会の内部装飾には息をのみ、マリインスキー劇場やミハイロフスキー



阿部晶人
あべ・あきひと／昭和49年大阪府生まれ。慶應義塾大学福本修二ゼミに在籍時に世界初といわれる剣道のホームページ（www.isenokami.com）を制作。（株）電通、オグルヴィ・ワン・ジャパン（株）を経て現在、面白法人カヤックに勤務。インターネットを中心とした広告クリエイティブ開発やキャンペーン企画立案に携わる。国内外のアワードを受賞多数。1997年より全日本剣道連盟情報システム委員。剣道三段。Twitter アカウントは Akihito_ABE。

今月の阿部：
世界大会のカウントダウンフォト、まだまだ写真募集集中です。ハッシュタグ #20wkcphoto をつけて剣道写真をインスタグラムに投稿してね！

バレエではロシア音楽を堪能した。ジョーリア料理店で食べた「ヒンカリ」は、中華料理の小籠包を大きくしたような肉汁料理で、噛んだ瞬間の熱汁との戦いも含めて楽しい。マクドナルドは撤退してなくなっていたが、その跡地にできていたバーガーショップは、味の面では全く遜色がなかった。ホテルの近くには、イートインのできるパン屋があり、毎朝そこで食べたいパンを指さして買っては頬張るのが、この旅の小さな楽しみだった。政治的には色々と言われる国ではあるが、街も食も、人々の暮らしも、実に豊かだった。日本にいて漏れ聞こえてくるロシア像と、現地で感じるロシアは、ずいぶんと違っていた。行ってみないと分からないものである。

フエンスング練習場が剣道場

今回、息子との再会、そして観光に加

えてもう一つ楽しみがあった。実は渡航前に、ロシア剣道に詳しい方にご紹介いただいて、サンクトペテルブルクで剣道の稽古を見学する機会を得ていたのだ。剣道好きの性というのだろうか、せっかくの旅行先でも道場のありかを探してしまう。妻には呆れられたが、こればかりは仕方ない。

指定された最寄り駅で待っていると、遠くからニコニコと近づいてきたのは六段のアレクセイさんだった。初対面なのに、まるで旧知の友のような笑顔。彼の案内で向かった道場は、普段はフエンスングのオリンピック選手養成に使われているという練習場だった。日本人からするとフエンスングと剣道は文化圏が違うが、細身の得物で相手と対峙するという意味では、遠くない親戚のようなものかもしれない。などと考えているうちに、次から次へと剣士が到着していく。総勢



サンクトペテルブルクの剣士たちとともに

およそ40名。かなりの数だ。アレクセイさんによれば、サンクトペテルブルクには彼を含めて六段が2名、五段が10名いるという。「俺たちは首都モスクワより活気があるぜ!」と冗談混じりに笑うその表情には、地元剣道への確かな誇りがにじんでいた。都市間のライバル意識は、剣道界にも万国共通らしい。

みっちり90分の稽古

稽古が始まると、彼らの真剣さに驚かされた。90分間、基本からみっちり、



カフェでは少し重い話題も…

非常に熱心に、真摯に稽古が続く。中には二刀に構える選手もいた。女性剣士の姿も多く、男性に混じって遠慮なく打ち込んでいる。掛け声も気合も、間合いもあらゆる部分が日本の道場と何ら変わらな。使う言葉こそロシア語だが、そこに流れている空気は完全に「剣道」そのものだった。むしろ礼儀正しさに関しては、日本以上と言っているかもしれない。少しばかり、感動してしまった。

印象に残ったのは、稽古後のひと幕だった。黙想が終わわり、最後の座礼をした直後、剣士たちが一斉にお互いに拍手をしたのだ。私は初めて見る習慣だった。共に稽古した相手への感謝と敬意が、あの拍手には込められていたのだと思う。これは日本にも持ち帰りたい良い習慣だな、と素直に思った。

稽古が終わると、多くの剣士が話しか

けてきてくれた。福岡に長く住んで薙刀も学んでいたという女性、日本の道場の思い出を懐かしそうに語る男性、日本語を少し話せる若手剣士。片言の英語と、時には身振り手振りを交えながらの会話ではあったが、剣道が、彼らにとって単なる異国の武道ではなく、生活の一部であり誇りである、ということがよく分かった。

カフェでは少し重い話題も

稽古の後、アレクセイさんたちと近所のカフェでお茶をした。話の途中、アレクセイさんはスマートフォンを取り出して、孫娘の写真を見せてくれた。「かわいいだろう」と目を細めるその顔は、日本のおじいちゃんともまったく変わらない。剣道六段の風格も、孫の話になれば一気に溶ける。国も言葉も違うのに、なんだかとても親しい親戚と話しているような気がした。剣道を通じて出会うと、こんなにも早く距離が縮まるものかと、改めて驚いた。

会話の中で、少し重い話題にも触れた。ロシアは今、色々と事情があつて、世界剣道選手権大会などの国際大会に出場できていないのだという。その事実を口にするアレクセイさんの表情は少しだけ寂しげだったが、恨み言のようなものはい切なかった。ただ、次の世代のために稽古を絶やしたくない、と静かに語った。稽古を目の当たりにしたばかりの私からすれば、これほど熱心で、これほど剣道

を愛している剣士たちが、世界の舞台に立てないというのは、あまりに寂しいことである。彼らがまた国際大会の畳の上で立てる日が来てほしい、と心から思った。

交剣知愛は国境を超える

剣道の世界には「交剣知愛」という言葉がある。剣を交えることによって、相手への愛情や敬意を知る、という意味だ。私は今回、稽古で竹刀を交えたわけではない。ただ道場の隅で見学し、稽古後のお茶を一緒にしただけである。それでも「交剣知愛」は成立するのだな、と思った。彼らが真剣に稽古する姿を見て、彼らの拍手を聞き、彼らの言葉に耳を傾けて、それだけで、私は彼らをすっかり好きになってしまった。剣を交える以前に、剣道を共に愛しているという事実が、すでに愛を運んでくれる。剣道という共通の道が、国境を軽々と越えていく瞬間を、確かに目撃したのだ。

様々な事情が、剣士たちの意志にかかわらず、彼らを世界の舞台から遠ざけている。もどかしい話だ。しかし、道場の中で共有される時間は、そんな事情の遥か向こうにある。綿毛の舞う街に、日本の剣道と何ひとつ変わらない礼儀と情熱を持った剣士たちが確かにいる。そのことを、私は忘れないでおきたい。そして、皆さんにも少しばかりお伝えしたかった。いつかまた、彼らと大会の会場で再会できることを、静かに願っている。